



太  
文  
言

布哇國皇帝陛下、條約書草案二付、意見

i 1062



114  
A 4406



皇  
帝  
陸  
下  
ノ  
條  
約  
書  
草  
案  
ニ  
付  
キ  
意  
見  
東  
京  
十  
八  
百  
八  
十  
一  
年  
七  
月  
十  
二  
日

大  
正  
十  
一  
年  
四  
月  
大  
隈  
侯  
爵  
郵  
寄  
踏

第一章 総論

拙者ハ或ハ言語ヲ用ヒ或ハ書面ヲ用ヒ以テ日本政府  
ハ海外諸強國ノ一ト利益アル條約ヲ取結フニ至ラン  
トノ冀望心ヲ發言シタルト屢々ナリ拙者ノ常ニ信シ  
タルニハ此ノ第一ノ條約ヲ取結ビタル片ハ他ノ諸強  
國ニ於テモ日本ニ於ケル其政事上ノ勢力并ニ其商業  
上ノ利益ヲ減サレメザラントテ欲シ一度發シタル  
運動力ニ随從シ以テ同一ノ條約ヲ承諾スルニ至ラン

太  
政  
官

ハ必常ナルトナリト  
一時ハ此第一ノ條約ヲ北米合衆國ト殆ント取結ハン  
トスルニ至リ其後又第二等ノ位置ニ在ル歐洲某國ト  
同趣ノ條約ヲ取結ハントスルノ案アリタリ然レ氏此  
等ノ案ニシテ其成功ヲ見サリシハ拙者ノ深ク悲歎セ  
ル所ナリトス  
故ニ猶又日本政府ニ於テ前同様ノ目的ヲ以テ今回ノ  
試ヲ為スハ拙者ニ於テモ眞ニ賛稱セサルヲ得サル所  
ナリ  
今回ノ事ニ関カル外國ハ世界ニ於テハ實ニ瑣少ナル

國ナレ氏其案モ緊要スル所ハ一先例ヲ設ケルニ在リ  
トス故ニ日本ニ於テ此條約ヨリ得ル所ノ直接ノ利益  
ハ僅少ナルモ遠キ結果ハ必ス洪大ナルベシ  
然レモ他ノ諸外國公使ハ此ノ特別條約ニ付キ満足セ  
サルトアルヘシト前言スル者アラン乎此レ即チ既ニ  
既ニ該條約ノ日本ニ取テ利益アルノ証ト云ハサルヲ  
得ス且之レアルモ外國交際上ニ大ナル變更ヲ来スノ  
源因タラサルヘシ又日本政府此レ迄諸外國政府ニ對  
シ數千ノ注意(俗ニ云フ遠慮ノ意)ヲ為シタルヨリ如何  
ナルノ結果ヲ收メタルトアリ我決シテ收メサリシナ

ラン將レテ然ラハ今回ハ彼等諸外國ヲ指スヨリ是レ  
布哇國ヲ指スニ對シ少シク意ヲ用ヒタルトテ外交上  
ニ失ヒ得ヘキ結果ハ決シテアラザルベシ  
唯恐ル可キモノトスヘキハ諸外國人民ハ其條約書中  
蒙恩惠國ノ取扱ハ各國皆之レヲ共受スヘシトノ條規  
アルヲ奇貨トシ布哇國政府ヨリ日本ニ讓与スル利益  
ト同一ノ利益ヲ日本ニ讓与スルト無クシテ日本政府  
ヨリ布哇國人民ニ讓与スル權利ト同一ノ權利ヲ得シ  
トヲ望ムヤニアリトス  
如斯ノ望ハ更ニ一瞬間モ之レヲ維持スル能ハサル

モノナルニモセヨ日本政府ニ大ナル混雜ヲ与フルト  
アルヘシ然レハ今豫メ之レニ答フルノ用意ヲナスハ  
當然ノトニシテ又諸外國政府若クハ其内若干ノ國ニ  
於テ如斯ノ望ヲ發スルノ場合アルヘシト豫定スルモ  
決シテ無益ノ事ニアラサルヘシ  
此ノ二個ノ点ハ各々分別シ第一望ノ法理ニ悖戾スル  
ト第二此ノ望ニ抗拒スルノ方法ヲ順次論究スル所アル  
ルヘシ  
第一望ノ法理ニ悖戾スルト  
一法律ニ於ケルモ結約者ノ間ニ於テ法律ト同様ナル

大  
文  
宮

一契約ニ於ケルモ、其一法規(若クハ一箇條)ノ意味  
及ヒ範圍ヲ探究センニハ必ス常ニ該法規ヲ設ケタル  
ノ趣旨、立法官若クハ結約者ノ該法規ヲ以テ達セント  
欲シタルノ目的、ニ溯ラサルヲ得ス而シテ外國條約ハ  
其君主ヲ以テ顯ハス各國民ノ間ニ於ケル真ノ契約ナ  
ルカ故ニ其意味ヲ探究センニハ此レ亦前同様ノ順序  
ニ從ラサル可ラス其根源ノ趣旨ニ從リ是レカ説明ヲ  
下サハル可ラサルナリ

兩結約國ノ甲ヨリ乙ニ對シ又乙ヨリ甲ニ對シ他ノ國  
民ニ讓与シ又ハ讓与スヘキ利益ト同様ノ利益ヲ與フ

ペシトスルノ條規ハ日本ト為セル條約ノ為メニ特更  
突明シタルモノニアリスレテ歐米各國間ノ條約ニモ  
用ニ來タリタルモノナリ唯其異ナル所ハ日本ニ於テ  
ハ日本ヨリ外國ニ對スルノミ即チ外國ノ為メノミニ  
該條規ヲ設ケタルモノニシテ外國ヨリ日本ニ對シ之  
レヲ約セサルト是レナリトス此レ又外國條約編纂ノ  
時ニ於テ外國ニ對シ日本ヲ同等ノ位置ニ置カシメ  
タル夥多ノ條規ノ一ニ算入スヘキモノトス  
然レ氏結約外國人ノ日本ニ於テ企望シタル目的ニ至  
テハ其歐米間ニ於ケル目的ト同一ナリトス即チ商業

上、航海、其他ノ外交上ノ利益ニ付キ日本ニ於テ他ノ  
國民ヨリ恩惠少ナキ位置ニ在ラサラントヲ欲スル是  
レナリ

一外國ト新ニ取結タル條約ハ他ノ條約國ニ於テ為メ  
ニ利スルヲ得ル所ノ特權若クハ利益ヲ組織スル乎否  
乎ヲ知ルヲ要スル片ニハ該條約ノ全体及ヒ總結果ニ  
就テ觀察セサルヲ得サルモノニシテ決シテ其條規ノ  
一又ハ若干ヲ分離セシメ若クハ孤立セシメ以テ之レ  
カ觀察ヲ下スヘキモノニアラス  
今爰ニ一例ヲ取ランニ日本ハ朝鮮ト一條約ヲ取り結

朝鮮ハ此條約ニ依リ日本ニ一金鑛ヲ讓與シ、日本ハ  
此條約ニ依リ其報酬トシテ朝鮮ニ其建築材、米麥、及ヒ  
家畜ノ無稅輸入(日本へ)ノ權ヲ讓与スルモノト仮定セ  
ンニ該條約ハ兩國ニ取テ利益アルモノト云フヘシ日  
本ニ取テハ金銀ノ不足シ建築材、米麥及ヒ家畜ノ過量  
ナラサルヨリ利益アリ、朝鮮ニ取テハ其鑛山ヲ開採ス  
ルニハ未ダ巧ミナラサレモ其建築材、米麥及ヒ家畜ノ  
ノ發賣ヨリ大利ヲ占ムルト能フヨリシテ利益アリト  
ス

然ルニ今若シ魯西亞ニ於テ海關稅ヲ拂フトナクシテ

日本ニ其建築材、米麦及ヒ家畜ヲ輸送センコトヲ企望シ  
金銀ヲ以テ是ニ相當スルノ報酬讓与ヲ為スコト無クシテ其  
企望ハ唯ニ笑フヘキモノナルノミナラス其不正不理  
ナルコトヲ示シテ髮帽ヲ衝カレメサラント欲スルモ能  
ハサルナリト云ハサルヲ得ス  
各國間ノ條約ハ民間ノ條約ヨリハ猶ホ一層ノ実意ヲ  
以テ之レヲ説明シ之レヲ執行セサル可ラサルハ一定  
シタルノ主義ナリ而シテ実意道理及ヒ自然ノ公道ニ  
於テハ條約ノ諸條規ヲ各々分離シテ別シテ適用スルヲ  
許サハルモノトス

今若シ民法上ニ於テ契約諸條規ノ分離シ難キコトノ議  
件起ルルハ之レニ反對スル程ノ無智無識ナル法學者  
ハ一人モアテサルヘキコトハ拙者ノ保証スル所ナリ民  
法上ノ法制ハ統テ佛朗西民法中甚タ明白ニ掲載シタ  
ル下記ノ諸主義ヲ含有スルモノニシテ外國條約ハ就  
中性法ニ依テ支配サル者ナレハ該主義ハ猶ホ能ク  
外國條約ニ適用シ得ヘキモノトス其第一ノ主義ハ曰  
ク諸條約ニ於テハ其文字ノ意義ニ拘泥スルヨリ寧ロ  
契約者双方ノ普通ノ意趣目的ノ如何ナリシ我ヲ探究セ  
サル可ラスト民法第百五十六條

故ニ今日日本ハ適當ノ報酬讓与ヲ受クルニアラサレハ  
某國ニ讓與スルヲ承諾セサリシトモ云フヘキ所ノ利  
益即チ有料利益ヲ無料ニテ他ノ外國人ニモ所有セシ  
ムルノ意ヲ以テ某國ト條約ヲ取結ヘルナリトハ少ク  
事理ヲ解スル者ノ想像スル能ハサルモノナリトス  
其第二ノ主義ハ曰ク諸條約ノ各條規ニハ全体行為ノ意  
味ヲ附シ諸條規ハ相互連接シテ其意味ヲ説明スルモ  
ハナリト民法第千百六十一條  
故ニ今日日本ニ於テ某外國ト一ノ新條約ヲ為スハ他ノ  
外國ニ於テモ某外國ト同様ノ利益ヲ得ンヲ企望セ

シニハ該條約ノ全体ニ就キ日本ヨリ某國へ讓与シタ  
ル權利ト某國ノ負擔シタル任トヲ算計シタル上ニア  
ラサレハ能ハサルモノトス  
其第三ノ主義ハ曰ク一條約ニ付キ疑義アルハ命約  
者ノ不利トナルモ寧ロ義務ヲ承約シタル者ノ利益ヲ  
謀リ之レカ説明ヲ為スヘシト民法第千百六十二條  
日本ノ外國條約上ニ於テ外國人民ニ最恩惠國ノ取扱  
ヲ讓与スルヲ約シタルハ其命約者ハ外國人ニシテ其  
義務ヲ承約シタル者ハ日本ナリ故ニ今該條規ニシテ  
兩義アリ疑義アリ拙者ハ決シテ然ラサルヲ信スト仮



定セシモ其疑義ハ日本ノ利益ヲ謀リ之レヲ説明セサ  
ル可ラス而レテ前主義ヲ此ノ場合ニ適用スルハ殊更  
ニ公當ナリトス何トナレハ此等外國ノ條約ノ草案ヲ  
發シタル者ハ當時ニ於テ條約ノ了ニ付テハ其敵手ナ  
ル外國ヨリ申呈セシ不充分ナル思想ナラテハ所有セ  
サリシ所ノ日本ニアラガレハナリ

拙者ノ主論ヲ佐ケン爲メ民法ノ總体及ヒ一般ノ主義  
ニシテ各國間ノ條約ニモ適用シ得ヘキ者ヲ引証シタ  
レハ本論ノ始メニ引証シタル所ノ大主義モ又佛朗西  
民法中ニ其明文アルヲ注意スルハ決シテ無益ノ業

ニアラサルベシ其文ニ曰ク諸條約ハ實意ヲ以テ之レ  
ヲ執行スヘシト(民法第百三十四條)

拙者ハ先ツ日本ト朝鮮トノ間ニ一條約ヲ取結ヒタル  
ト仮定シ該條約ニ依リ朝鮮ヨリ日本ニ爲シタル讓与  
ヲ算計スルトモナク又他ノ外國ニ於テ日本ニ是レト  
同様ノ讓与ヲ爲ストモナキ該條約ノ條規ヲ分離シ其  
朝鮮ニ利益アルモノ、ミテ取り之レヲ他ノ外國ニ適  
用スルノ不正不理ナルハ既ニ明白ナルヲ論定シタ  
リ

今又爰ニ頃日ヨリシテ日本近傍二國ノ間ニ於テ殆ン  
ト実事トモナラントスル所ノ猶一層適切ナル一例ア  
リ

今日本ニ於テ其多少遠キ海中ニ於キ土地ノ譲与ヲ得  
ントスルノ報酬トシテ某國ニ權利特權別權ヲ譲与ス  
ルヲアリト仮定セシニ此ノ如キノ場合ニ於テ他ノ外  
國ハ何レノ土地ノ譲与ヲモ為スヲナクシテ同様ノ特權  
ヲ得ルヲ能フ可キ乎決シテ然リト答フル者アラサル  
可レ且他ノ外國ニ於テ同様ノ譲与(土地)ヲナセハ同様  
ノ利益ヲ得ルト仮定スルヲモ能ハサル可レ何トナレ

ハ日本ハ其殖民地ヲ増加スルヲ欲セサルヲモアルヘ  
ケレハナリ竊初ノ某國中ニ一殖民地ヲ設クルニ特別  
ナリシ理由ハ他ノ外國ニ對シテハ起ラサルヲアルヘ  
シ殖民地ハ其本國ニ取テ一ノ富源トナラシ<sup>隨分</sup>永キ間  
ハ都<sup>初</sup>テ其負擔トナルヲ屢々ナリトス故ニ此ノ如キノ  
條約ハ之ヲ取結タル國ニノミ固有ナルモノニシテ他  
ノ外國ノ是レニ據リ同様ノ企望ヲ發コスノ基礎タル  
能ハサルヲアルヘシ  
今爰ニ又拙者ノ論スル所ノ情況ニ能ク類似レ竊モ適  
切ナル一新事件ノアルアリトス

支那ハ近時魯西亞ト一條約ヲ取結ヒタリ魯西亞ハ該  
條約ニ依リ支那ニ對シ權利、特權ヲ有ス然レモ支那ハ  
又該條約ニ依リ伊犁教地方ニ於テ支那ニ取リ利益ア  
ル境界ノ改正ヲ為スヲ得ルモノトス然レモ支那ト蒙  
恩惠國ノ取扱ヲ受クルノ條約ヲ有スル英吉利、佛朗西  
ニ於テモ新條約ヲ以テ支那ヨリ魯西亞ニ附与スル所  
ト同様ノ權利、特權、別權ヲ支那ニ向テ請求スル恐レア  
ル可キ乎

此ノ如キノ企望ハ決シテ之レヲ起ストアラザルヘシ  
拙者ハ今爰ニ此問題ヲ論究スル何レノ著書ヲモ所有

セザルヲ悲歎スルナリ此問題ハ万国公法ノ諸著述家  
ニ於テモ怠漏シタルヲ如シ拙者ハ唯ダローズ氏著佛  
朗西法令彙纂第四十二卷第五篇各國條約ノ部第二百  
十項ニ於テ前記ノ趣意ヲ明言スル左ノ文言ヲ發見シ  
タリ

其文ニ云ク有<sup>○</sup>料<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>趣<sup>○</sup>意<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>以<sup>○</sup>テ<sup>○</sup>一<sup>○</sup>外<sup>○</sup>國<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>附<sup>○</sup>与<sup>○</sup>シ<sup>○</sup>タル<sup>○</sup>利  
益<sup>○</sup>及<sup>○</sup>令<sup>○</sup>へ<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>或<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>讓<sup>○</sup>与<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>報<sup>○</sup>酬<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>如<sup>○</sup>キ<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>所<sup>○</sup>有<sup>○</sup>ハ<sup>○</sup>他<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>  
外<sup>○</sup>國<sup>○</sup>ヨ<sup>○</sup>リ<sup>○</sup>之<sup>○</sup>レ<sup>○</sup>ヲ<sup>○</sup>請<sup>○</sup>求<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>可<sup>○</sup>キ<sup>○</sup>モ<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>ニ<sup>○</sup>ア<sup>○</sup>ラ<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>ト

現ニ拙者ノ掌中ニ在ル布哇國外務卿ノ公信中ニ記載  
スルニ前<sup>記</sup>主義ト同様ナルクラレンドン侯ノ意見ヲ

以テセリ談意見ハ英國内閣中ノ他ノ諸員ノ同意ヲ得  
ガリシケ如キハ実事ナルモクテレンドン侯ノ勢力ハ  
甚ダ大ナル者トス

日本政府ト布哇國ト取結ブ可キ條約ノ草案ニ付キ一  
大國代理者ノ懇切ナル紹介ヲ承諾シタレバ遠慮ナリ  
其人ニ對シ其一個ノ意見英ニ其本國ニ於テ勢力アル  
可キ輿論ヲ問フヲ得ベシ

拙者ハ以上ニ論記スル所ヲ以テ諸強國ニ於テハ布哇  
國ト同様ノ負擔ヲ受クルトナクレテ布哇國民ト同様

ノ權利利益ヲ日本ニ於テ所有セントテ企望スルハ道  
理<sup>公道</sup>實意ニ反對スルノ行為ナル事ヲ論定シタリト思考  
ス

談企望ニ抗抵スルノ方法ニ論及スルノ前ニ先ツ談企  
望ハ起ラザル者トシ他ノ外國ニ於テモ布哇國條約ト  
同様ノ條約ヲ日本ト交換メントテ冀望スルモノト仮  
定セン

支那魯西亞ノ兩國ニ於テ此條約ニ同意メントハ多分  
其目的ヲ達スルヲ得ベシ談兩國ハ日本ノ近鄰ニ位ス  
ルヲ以テ其人民ノ多クハ日本ニ來住シ勞カト商業ト

大  
文  
宮

ニ依リ生活ノ路ヲ得ベシ而シテ該國人ハ既ニ今日ニ  
於テハ被判者ニ對シ支那魯西亞ノ裁判ヨリ一層ノ安  
全ヲ與フルノミナラズ就中近キ内ニ於テ今日ヨリ猶  
ホ一層満足ス可キ位置ニ達セントスル所ノ日本裁判  
ニ就ヒテハ更ニ何モ恐ルハトコロアラザルベシ  
然リ而シテ日本政府ハ前以テ此全意ヲ承諾シ又外國  
人ニ對シ其國ヲ開クコトヲモ既ニ默諾スル者ナリト批  
者ハ信セザルヲ得ス

今開國論ニ付キ批者ノ意見ヲ陳述センニ日本ヲ開國  
スルコトハ新タニ繁榮ノ一大基礎ヲ建ツルコトハ批者ノ

常ニ確信スルトコロナリ批者ノ屢々聞知セシ一國ノ  
工業、商業及ヒ諸耕作ハ舉テ外國人ノ掌中ニ陥ルラン  
トノ恐レハ批者ノ決シテ同意セザルトコロナリ日  
本ニ於テ其國ヲ外國人ニ開ク時ノ結果ハ他ノ諸外國  
ニ於テセルト決シテ異ナラサルベシ而シテ土地ノ買  
得者ハ甚タ少数ナル可シ何ントナレハ資本者ハ外國  
ニ於テ其資本ヲ不動産ニ變更スルヲ欲セザレハナリ  
將外國人ノ日本ニ於テ為ス所ノ僅カノ土地買得ハ未  
タ日本ニアラサル所ノ耕作ノ方法ヲ日本ニ教与シ又  
日本耕作者ノ實驗ノ足ラサルヨリシテ今日迄其成功

ヲ見ガリシトコロノ物産ヲモ培植スルノ利益アルベ  
シ牧野就中家畜ノ如キハ日本ニ繁殖シ以テ全國ノ大  
利益トナルベシ  
日本ヲ開國スル時ハ必ス外國人ノ工業多少起ルハ疑  
フ可ラザルナリ然レモ諛工業ノ内國人工業ニ對レテ  
テ為ス所ノ競争ハ大製作場ノ其近傍ニ弘散スルトコ  
ロノ債銀共ニ幸福ヲ以テ十分ニ償フ所アルベシ且一  
工業ニレテ内國ニ於テ内國ノ元質物ト内國ノ勞カト  
ヲ以テスル以上ハ縱然モ其所有者ハ外國人ナルモ又諛  
工業ヲ名ヅクルニ内國工業ノ稱ヲ以テスルハ適當ノ

ヲナルベシ

唯拙者ノ少シク憂慮スルトコロハ支那人ノ夥多ナル  
來往ニアリトス而シテ其理由ニアリ其一ハ彼業ノ日  
本人民ノ勞カニ對シ為ストコロノ競争ニシテ其二ハ  
鴉片ノ支用ヲ普及スルヤノ危難之レナリトス  
然レモ此ノ恐レハ左ノ理由ニ依レハ自カラ減少スル  
者ト云フ可シ其一ハ勞カノ債銀ハ重墨利加ニ於ケル  
ヨリモ日本ニ於ケル方一層低下ナルヲ以テ往住セシ  
トスルトコロノ支那人ハ尚ホ北米合衆國ヲ擇ム可キ  
之レニシテ其二ハ鴉片吸烟者ハ之レヲ概言スルニ往

住ヲナストコロノ者ニ非ラザル之レナリ鴉片吸烟者  
ハ其生活ノ方法ヲ改良セシメ其本國ヲ去テ遠ク  
外國ニ出稼スル程ノ活弁カラ有セザルナリカリフオ  
ルニアニ支那人ノ來住シタルヨリ該地方ニ鴉片ノ支  
用若クハ濫用ヲ輸入シタルハ嘗テ人ノ聞カサルトコ  
ロナリ

拙者ハ外國人ニ日本ヲ開國スルヨリシテ其得可キ利  
益ニ付キテハ今爰ニ之レヲ喋々スルヲ必用ト信セガ  
ルナリ然レ氏此問題ニ付キ拙者ニ反對論ヲ贈ラルハ  
アテバ必ス之レニ對シ至當ノ答辨ヲ下ストコロア

アル可レ

然レ氏日本ハ外國人ニ對シ裁判權ヲ有スルニ非ラザ  
レバ決シテ其國ヲ開クニ思考スルヲ得ズ又思考ス  
可ラザル者トス然レ氏若レ此点ニ於ケル日本ノ權利  
(法權)ヲ外國人於テ承認スル以上ハ開國ニ付テノ經濟

上ノ反對論ハ容易ニ排撃スルヲ得ベシ  
今之レニ反シ海外諸強國ハ布哇條約草案ノ結果(條規)  
ヲ分離シ其負擔トナル分ハ之レヲ受ルナクシテ其利  
益トナル分ノミ之レヲ請求セシテ企望スルモノト  
仮定メンニ日本ニ於テ此企望ニ抗拒スルノ最良方法

ハ如何ナル我ヲ論究セサル可ラス

此ノ場合ニ於テハ照カヲ以テ抗抵スヘキニアラサル  
トハ明白ナリトス海外諸強國ニ於テ條約(其請求スル)  
ノ執行ヲ請求シ日本政府ノ喜諾ヨリ之レヲ得サル時  
ハ其軍艦ヲ日本海上ニ威示シ最後ノ掛合(最後ノ脅迫)  
ヲ送ルニ至ランハ疑フヘクモアラザルナリ此時ニ當  
テハ日本ハ之レニ抗論スルヲ得ベシ又必ス之レニ抗  
論セサルヲ得サルナリ然レモ此ノ如キノ場合ニ立至  
リ固ク抗抵スルハ向フ見スノ有様ニシテ且時宜ニ依  
テハ為メニ將來ニ日本ノ獨立ヲ誤マルトアルヘシ

昨此ノ場合ニ於テ用フヘキ遼道ナル一個ノ方法ハ仲  
裁々判ヲ仰クニアリトス而シテ各強國ハ決レテ之レ  
ヲ拒絶スルヲ敢テセサル可シ

日本ニ取テハ仲裁者ノ選定ニ多少ノ困難アルヘシ日  
本ト條約ヲ有セサル國ノ君主若クハ主領ニ仲裁者ヲ  
ルヲ依頼スルトハ能ハサルモノトス而シテ契約國ノ  
家多數ハ皆日本ノ利益ト反對スル所ノ利益ヲ有ズル  
モノナリ然レモ此ノ困難タル決定スル能ハサルモノ  
ニアラス日本ハ宜シ其意見ニ利益アル二個ノ仲裁者  
ヲ選ミ海外諸強國モ其己ノ意見ヲ賛成スル所諸國中



ヨリ之レ又二個ノ仲裁者ヲ選ムヘシ此ノ四仲裁者ノ  
意見ハ必ス分立ス一キハ明白ナリ然レモ如此四ノ  
仲裁者アルハ万国公法上ニ付キ深密ノ議論アルヨ  
リ當議件ヲレテ大ニ明瞭ナラシムヘシ而レテ該仲裁  
者ハ其意見ヲ合致セシヌン為メ更ニ第五ノ仲裁者ヲ  
設ケルトナリ該條約ノ利害ニ付キ他ノ諸國ヨリ関  
係ノ少ナキ者仮令ハブレイジュール國皇帝若クハ瑞典  
國王ノ如キ者ヲ選任スヘシ

該議件ハ歐洲ノ法律學者ニシテ日本政府ノ顧問タル  
者ヲ以テ之レヲ辨明セシムルハ其決議タル日本ノ

利益トナルハ疑フ可キニアラザルナリ

拙者ハ爰レ迄ハ諸強國ノ企望ハ布哇條約ヲ全ク取結  
ヒタルノ後ニ於テ癸卯ル者ト假定シタリ

然レモ一先例ヲ設ケルノ好機會ヲ棄ルトハナクレテ  
該條約ヲ決定スルノ前ニ豫メ前記ノ困難ヲ豫防スル  
ノ所置ヲ為ス能ハサル乎

拙者ハ之レヲ為スヲ得ベシト信ズ故ニ今其所置ヲ左  
ニ指示スル所アル可シ

該條約ノ未タ鈴印ニ受ケサルノ内ニ西契約者ノ間ニ  
於ケルノ結果(條規)ト他ノ諸強國ニ於テ該條約ニ付

前記ノ説明ヲ承諾スルトトテ相從屬セシムルノ一方法ヲ求メザル可ラズ

然レハ北米合衆國トノ條約草案ノ終リニ於ケル條規即チ其條約ハ日本ニ於テ他ノ諸強國ト同様ノ條約ヲ取り結ビタル後ニ非ザレバ実行ス可ラザル者トスル如キ條規ヲ布哇條約草案中ニモ插入スルカ如キハ拙者ハ決シテ之ヲ<sup>言</sup>癸議セサルベシ此ノ如キ條規アルノ條約ヲ取結ブハ一方ヨリハ其條約ヲ世上ニ現出セシメ一方ヨリハ之レヲ破滅スル者ト云フ可レ故ニ北米合衆國ノ條約ノ如キハ之レニ名ツクルニ隋<sup>隋</sup>胎條約

ノ稱ヲ以テスルモ敢テ不當ノトニアラサルベシ此ノ如ク不幸ニシテ且ツ不<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>法<sup>ナ</sup>ル條規ハ何レノ方ヨリ來タリタルカハ拙者ノ承知セザル所ナリ又該條規ハ他ノ諸強國ニ於テ何レノ負擔モ受ケルトナクシテ最<sup>ニ</sup>恩<sup>惠</sup>ヲ取扱ヒテ請求スルノ企望即チ爰ニ今日論擊スル所ノ結果ヲ避ケンノ目的ナリシヤ之レ又拙者ノ知ラザル所ナリ其ノ原因ノ何レナルニモセヨ其結果ハ全ク無効ニ屬シタリ且又然ラザルヲ得ナリシモノナリト云ハサルヲ得ス

他國ニ先<sup>ニ</sup>タチ此種ノ條約ヲ為スヲ以テ其利益ナリ

太  
文  
宮

思考セザリシ所ノ國民ハ此等ノ國民ヨリ一層勇氣  
且自由ナリシ他ノ一國民ノ利益ノ為メニ該條約ノ實  
行セラル、ヲ見ルニアラザレバ同種ノ條約ヲ取結バ  
ニ至ラザルベシ故ニ一外國ニ於テ該條約ヲ取結ビ其  
利益ヲ受クル時ハ他ノ國民モ競争心ヨリシテ遂ニ同  
様ノ條約ヲ取結ブニ至ルヘキ者トス  
然レモ若シ該條約草案ヲシテ明文ヲ以テ他ノ諸外國  
ノ同意ト相從屬セシムルハ諸外國ニ於テハ之レニ  
同意スルヲ急カザルベシト豫定セザル可ラズ  
是レヨリ更ニ布哇條約草案ニ立戻リ尚ホ論述スルト

ニロアルヘシ

日本ノ現在ノ利益ハ他ノ外國ヲシテ布哇條約ト同様  
ノ條約ヲナサシムルニ非ラズ但シ將來ノ為メニ之レ  
ヲ冀望シ又之レヲ先見スルヲモ得ベシ然レモ其目下  
ノ利益ハ他ノ外國ヲシテ其自己ノ利益ノ為メニ現在  
條約ノ諸條規ヲ分離セシメザルニ在リトス  
此ノ現在ノ目的ヲ違マンニハ他ノ外國ニ於テ前記ノ  
企望ヲ癸イサ、ルノ約束ト現條約草案ノ結果トヲ從  
屬セシムルヲ要ス  
此約束ハ一ノ秘密條約中ニ記載スルヲ要ス何トナシ

ハ若シ此ノ約束ノ世ニ知ラル、片ハ他ノ諸外國ハ此  
約束條約ヲ覆滅セシムル為メノミニ於ケルモ其企望  
ヲ發スルヲ怠ラザルベケレバナリ  
秘密條約ナル者ハ決シテ珍ラシキ者ニアラザレバ今  
爰ニ其正不正ヲ論スル迄ノ要モナシ而シテ其目的ハ  
即チ他ノ國民ノ激動心ヲ適宜ニ遇シ以テ正當ノ利益  
ヲ擁護スルニアリトス

日耳曼伯林府ノ万国公會ニ於テ彼ノ有名ナル伯林條  
約ヲ議スル時ニ於キ英吉利ハ既ニ土耳其ト一ノ秘密  
條約ヲ取り結ビ該條約ニ依リ土耳其ハ英吉利ニ讓与

スルニシレバ爾島ヲ以テシタリ故ニ此場合ニ於テ他  
ノ外國ハ巧ミニ玩弄サレタル者ト云フベシ  
秘密約束ノ布哇國民ニ取リテ要用ナルハ日本國民ニ  
取リテ要用ナルヨリ決シテ僅少ナラザルベシ布哇國ニ  
於テモ他ノ國民(就中英吉利)ト亦取恩惠國ノ取扱ヒラ  
附與スル所ノ條約ヲ有スルトアルベキハ疑ヒナシ故  
ニ日本ニ於テ其國ヲ布哇人民ニ開キタルノ報酬トシ  
テ布哇國ヨリ関稅上ノ或ル利益ヲ得タリトセシニ布  
哇國ハ其邦内ニ於テ他ノ國民ニモ無料ニテ同様ノ利  
益ヲ與フルノ考ヘラザルベシ又布哇國ニ於テ其裁

判権ヲ日本ニ放棄シタルノ報酬トシテ日本ヨリ或  
特権別権ヲ得タリトマシニ彼レ(布哇)ハ日本ニ於テ日  
本ニ同様ノ讓与ヲナサバ爾他ノ國民ノ競争ヲ有セザ  
ルニ於テ利益アル者トス是レ即チフォンテーヌ氏著小  
説叢書中印度一小説ノ部ニ於テ一猫ノ火中ヨリ粟子  
ヲ拾ヒ出タレタル時一猴アリテ之レヲ食フトアルノ  
類ノ如シト言ハザルヲ得ス(此小説ノ意ハ人ヲ什器ニ  
シテ而シテ已レハ好味ヲ占ムルノ謂ナリ)  
布哇國ノ方ニ於テモ諸強國ノ專横ナル企望ニ就キ受  
ケントスル所ノ危難ヲ能ク了解シタル者ト云フヘシ

何トナレハ該國外務卿ハ其公信ヲ以テ一ノ説明條規  
ヲ草按ニ附加セシテ望メバナリ然レ共該條規(此條  
規ニ付テハ特別ノ觀察ノ部ニ於テ論ズル所アルベシ)  
ハ以テ諸強國ヲ束縛スルヲ能ハザルナリ  
故ニ布哇條約諸條規ヲ分離セシメントスル諸強國ノ  
企望ヲ痿止スルハ左ノ一方法ヨリ他ニアラザルナリ  
其方法タル若シ他ノ外國ニ於テ我等兩國ノ間ニ取結  
ビタル條約ノ結果ヲ分離シ互ヒノ負擔共ニ讓与ヲ受  
クルヲナクシテ唯彼等ニ利益アル所ノ者ノミヲ取ラ  
ント欲スルヲアルハ此條約ヲ取結バサルベシ又

太  
政  
官

此條約ヲ引キ裂ク、シトノ秘密條約ヲ取結ブ是レナ  
リ  
布哇條約ノ成立セガル以上ハ諸外國ノ企望モ從テ消  
滅スルハ必然ナリ  
若シ日本布哇ノ兩國ニ於テ此秘密條約ヲ為サズレテ  
又約束條約ノ代リニ唯單純ナル一條約ヲ取結ブニ止  
リタルハ兩國ハ前示ノ危難ニ遭遇スルノ位置ニ有  
ル者ト云フベシ又兩國ハ自テ其固有ノ網中ニ陷井リ  
タル者ト云フ可シ  
今秘密條約ヲ取結ブト仮定センニ其基礎ヲ建ルヲ

以テ必用ナリトス

一或ハ若干ノ外國ニ於テ前記ノ企望ヲ發シタルノ單  
一ナル事實アルヨリ此有益ナル兩國ヲシテ其條約上  
ヨリ發ユル相互ノ利益ヲ受クル能ハザレシムルト有  
ル可ラズ此ノ如キノ事ヲ決スルニハ外交上單ナル書  
信ノ往復ヲ以テ充分ナリトス可ラガルモノナレバ此  
事タル今一層困難ノ点ニ達シタル者ト豫定セサル可  
ラサルナリ  
而シテ此場合ニ於テ起ル可キ事實ハ二様ナリトス  
其一ハ日本ニ於テ一仲裁裁判ヲ設ケントテ發議シ諸

太  
政  
官

強國ニ於テモ之レヲ承諾シタル者トスル是レナリ此  
場合ニ於テハ該仲裁者ニ於テ判決ヲ下タサ、ル間ハ  
布哇條約ハ維持サル、者トス  
若シ仲裁者ニ於テ外國ノ企望ヲ不理ナル者ト判決シ  
タル時ハ布哇條約ハ尚ホ維持サル、者トス若シ之レ  
ニ反シ仲裁者ニ於テ外國ノ企望ヲ道理アルモノト判  
決シタル時ハ即チ此時ニ於テ秘密條約ヲ提出ス可シ  
而シテ布哇條約ノ消滅スル以上ハ外國ノ企望ハ寧早  
存在スルノ趣旨ナカル可シ  
其二ハ諸外國ニ於テ仲裁々判ヲ承諾セズシテ一若シ

クハ若干ノ國ハ多少不快ナル若シクハ多少慇懃ナル  
書面往復ノ後寧後ノ掛合ヲ送り或ハ其軍艦ヲ日本海  
上ニ威示シ或ハ其公使ヲ呼戻シタリトスル是レナリ  
然ル時ハ日本ニ於ケルモ布哇ニ於ケルモ敢テ戰運ニ  
投棄スルハ其欲セザル所ナルベケレバ爰ニ於テ又秘  
密條約ヲ提出ス可キモノトス

○總論ノ要略

拙者ハ本論ノ始メニ於テ日本政府ハ假令一僅少ナル  
ノ一外國ニテモ之レト日本ノ君主權ニ屬スル諸權利

就中裁判權及外國人ヲシテ遵奉ノ義務ヲ負ハシムル所ノ規則制定權ヲ承認スルノ一條約ヲ取結ブトテ大ニ利益アルヲ詳論シタリ此ノ一先例ヲ設ケタル以上ハ勢ニ他ノ諸外國ヲシテ同様ノ利益ヲ得ンヲ欲スルノ心ヲ起サシメガルヲ得ガルトハ拙者ノ確信セル所ナリ

拙者ハ又其次キニ於テ日本政府ノ先見セル障礙ニ論及シタリ諛障礙ハ他ノ諸強國ニ於テ其裁判權ヲ讓与スルトナクシテ日本ニ於キ新條約國民ト同様ノ權利ヲ得之レヲ執行セントスルノ企望心ヲ發スルトアル

ベキ是レナリ

拙者ハ又條約ノ諸條規ヲ分離セントスルノ諛企望ハ道理公平及ニ實意ノ三者ニ反對セル者ナルヲ指示セリ

拙者ハ此ノ議論ヲ補ケルニ同様ノ場合ノ為メニ記載シタル佛朗西民法ノ明文ト又同様ノ件ニ付テノ彼ノ有名ナル佛朗西著述家ダローズ氏ノ意見ト布哇政府ニ於テ既ニ承知セルケラレンドン侯ノ意見トヲ以テシタリ

拙者ハ其次キニ若レ海外諸強國ニ於テ外交上ノ書信

大  
文  
宮



往復ノ後強迫主義ヲ以テ益々其企望ヲ主張スル時ニ  
於テハ日本政府ニ於テ諛企望ニ抗拒スルノ方法、如  
何ナルヲ要スル哉ヲ討究シタリ而シテ此ノ如キノ場  
合ニ於テ日本ノ用ユルヲ得可キ名譽ナル單一ノ方法  
ハ只仲裁ヲ判テ設クルニアルトト思考セリ  
終リニ於テ拙者ハ仲裁者ノ不幸ナル判決アルモ日本  
ハ之レヲ甘受スルヲ要セザルノ一方法ヲ發言シタリ  
其方法タル一ノ秘密條約ヲ取結ビ以テ若シ仲裁者判  
判決ハ次第ニ依リ他ノ諸強國ニ於テ本條約ハ諸條規  
ヲ分離セシメ其負擔トナル者ハ之レヲ受クルトナク

シテ其利益トナル者ハミテ請求スルハ權利アリト思  
考スルトアルハ本條約ハ無効ニ屬ス可レト云フニ  
アリトス

拙者ハ目下ニ於テ別ニ緊用ナラザル細節ノ点ハ之レ  
ヲ討究セザリシ其細節タル即チ秘密條約中ニ掲記ス  
ル約束ハ停止ノ主義ナルヤ又ハ決行ノ主義ナルヤヲ  
定ムルニアリトス第一ノ場合ニ於テハ表面ノ條約ハ  
直チニ之レヲ執行ヤズレテ適宜ノ口実ヲ設ケ其執行  
ヲ停止スヘシ然レ其内実ハ困難ノ局ヲ結ブニ至ル  
マデ其執行ヲ延期スルニアリ第二ノ場合ニ於テハ本

條約ハ鈴印ノ後指定シタル期日ヨリ直ニ之レヲ執行  
スル者トス但シ必用ナル片ニ提出ス可キ秘密條約中  
ニ先見シタルノ場合ニ於テ之レヲ確定ス可キ乎或ハ  
之レヲ廢棄ス可キ乎ハ臨機應用スヘキ者トス  
此ノ終リノ議件ハ秘密條約ノ主義ヲ採用スル者ト決  
定シタル上ニ於テ更ニ論定ス可キモノトス  
拙者ハ今諸條規ノ順序ヲ逐ニ本條約ノ各法規ニ付キ  
特別ノ觀察ヲ提出スルトコロアル可シ  
第一條第二條及ヒ第三條 此諸條規ハ單ニ体裁上ノ

又言ナレバ之レニ付キ別ニ意見ナレ

第四條 此條規ト次キノ條規ハ本條約ノ全体即チ骨

髓トモ云フヘキ者ナリ日本ハ該條規ニ依リ其君主權

ニ屬スル諸權利即チ立法權、裁判權、行政權ノ三者ヲ恢

復スル者ナリトス

唯又章上ニ於テ一ノ *whenever* ナル語アリテ今一ノ

*whenever* ナル語ヲ要スルニ似タリ此語ハ佛朗西語

ニテ *soit que* (ニテモ)ノ意味ヲ有スル者ニシテ常ニ

此語ヲ用ヰル片ハ次キニ尚ホ一ノ *whenever* ナル語

ノ來ルヲ要ス

第五條 此條ノ又言ニ依レハ日本ニ於テ布哇人民ニ  
附與スル所有ノ權ハ日本人民ニ屬スル統テノ權利特  
權ニモ適用ス可キ乎又ハ商業旅行及ヒ住居ニ關シ日  
本人民ノ所有スル諸權利諸特權ニノミ適用ス可キ乎  
ノ点判然セザルナリ然レモ布哇人民ニ與フルニ政權  
參政權又官吏トナルノ權ヲ以テスルノ趣意ニアラサ  
ルハ勿論ナルベシ且ツ何レノ國ニ於ケルモ之レ業ノ  
權利ハ内國人民ノミ所有ス可キノ特權ナリトス然レ  
モ該條約ハ今日外國人ニ嚴禁シタル所ノ二個ノ權即  
チ不動産買得權、抵當貸附權ノ二權ヲ布哇人民ニハ附

與セザルノ意ナル乎

若シ布哇王國ニ於テ外國人ハ前記ノ二權ヲ所有セズ  
又日本人民モ彼ノ地ニ於テ之レ等ノ權利ヲ所有スル  
能ハザルモノナラバ日本ニ於テモ亦布哇人民ニ之レ  
等ノ權利ヲ拒絶スルハ了解シ得可キナレトモ若シ外  
國人ノ布哇國ニ於テ土地ヲ所有シ得ル者トセハ日本  
ニ於テモ其報酬トシテ布哇人民ニ同様ノ權利ヲ與ヘ  
ザルハ拙者ノ悲歎セントスル所ナリ  
何レノ場合ニ於ケルモ抵當貸附權ノミハ縱然ハ其報  
酬ナキモ布哇人民ニ之レヲ許可スルヲ要スル者ナリ

大  
女  
宮

ト拙者ハ信スルナリ

談議件ハ現在ノ條約草案ヨリモ寧ロ之レニ次ヒテ起  
ル所ノ諸條約ノ為メニ緊要ナル者トス拙者ハ即チ此  
点ニ於テ意見ヲ建ル者ナリ外國人ハ若シ日本ニ於テ  
不動産ヲ抵當トシテ受理スル能ハザルハ日本人ニ  
其資本ヲ貸与スルトアラザルベシ然レモ日本ニ於テ  
ハ其農業工業及ヒ商業ノ擴張ヲ謀ランニハ必ス資本  
ヲ要スルモノトス

抵當貸附ヨリ起ル所ノ權利ハ債主ヲシテ抵當物ノ所  
有權ヲ得ルニ至ラシメズシテ債主ニ於テハ抵當物ノ

現所有者(實際其負債者本人タラザルノ場合ニ於テモ)  
ヨリ其償却ヲ請求スルノ權ノミヲ有スル者トス而シ  
テ若シ談議所有者ニ於テ其償却ヲ拒絶スルトアラバ債  
主ハ談議抵當不動産ヲ公賣セシメ賣上高ノ中ヨリ其貸  
金ヲ取立ツル者トス日本現在ノ編制ニ係ル抵當權ハ  
其債主ニ與フルニ償却ノ代リトシテ抵當不動産ヲ所  
有スルヲ得ルトヲ以テスル者ナレモ新民法ニ依レバ  
此ノ如キノ權ハ之レヲ債主ニ與ヘザル者トス故ニ外  
國人ニ禁スルニ不動産ヲ抵當物ニ取り日本人民ニ貸  
附スルトヲ以テスヘキノ大ナル理由之レナカルベシ

第六條 第六條第一項ノ法規ハ以上ノ趣旨ト適合セ  
ザルハ殆ント人ノ之レニ注意セザリシカ如シ該法規  
ハ布哇人民ニ他ノ外國人ヨリ大ナル權利ヲ與フルノ  
代リニ其交通權ヲシテ他國人民ハ出入滯留スル諸海  
港及ヒ諸川河ト外國貿易ニ從事スル日本船舶ハ碇泊  
スル諸海港トニ限ラレタリ此制限ハ布哇國民(及ヒ其  
例ヲ逐フ者ト)ヲシテ其今日ノ位置ト大差ナキノ位  
置ニ居ラシムベシ

第六條第二項ノ法規(彼レ等ハ住居スルヲ得ベシトア  
リ)ハ又擴張主義ヨリ寧シロ制限主義ニ在リト云フヘ

シ布哇人民ハ商業ヲ為スヲ得ベキモ工業及ニ農業ニ  
從事スルヲ得可キノ明文ナシ而シテ布哇人民ニ此ノ  
二業ニ從事スルヲ禁スルノ趣旨ニアラザルハ拙者ノ  
推定スル所ナリ然レモ第五條ノ趣旨ニ依リ竊早疑フ  
可クモアラザル如ク布哇人民ニ於テ商業ニ從事スル  
ヲ得ベシト明言スルノ勞ヲ取リタル以上ハ又彼レ等  
ニ於テ工業ニ農業ニ從事スルノ權利アルヲモ公告  
スルヲ得ベシ  
又布哇人民ニ於テハ日本人民ト會社ヲ結ブヲ得ルヤ、  
明文モナシ然レモ此件ハ宜シク衆ニ決定ス可キ者

ニシテ此權利ヲ附与スルノ主義ニ定ムルヲ以テ要用  
ナリトス

今日ノ所ニ於テハ此會社ノ權ヲ許可セラレザルハ拙  
者ノ了解スル所ナリ何トナレハ之レニ付キ訴訟起ル  
片ハ裁判權ノ葛藤ヲ来タス可クシテ且ツ同一ノ契約  
ニ於ケルモ其所管ノ日本裁判所タリ外國領事裁判所  
タルニ依リ全ク反對ノ判決ヲ受クル如キトアル可ケ  
レバナリ然レハ布哇國民ニシテ日本裁判所ノ所管ニ  
屬スル以上ハ是レ等ノ障碍ハ宜早之レナキ者トス  
第六條ノ他ノ二項ニ付テハ別ニ意見ノ提出ス可キモ

ノナシ

然レハ次キノ諸條ニ論遷スルノ前ニ布哇人民ノ歸化、  
布哇人民ト日本人民トノ間ニ於ケル結婚、養子、養女、及  
遺書ノ事ニ付キテハ何レノ法規モアラザルトテ爰  
ニ喚起ス

第七條 此條規ハ甚タ善良ナルモノニシテ此意見書  
ノ初篇ニ於テ論擊シタル檀横ノ企望ヲ豫防セントス  
ル者ナリ然レ共此條規ハ他ノ外國ヨリ起ス可キ企望  
ニ付テハ何レノ勢カモナクシテ唯布哇日本兩國間ニ於  
テノミ其功アル者トス將タ兩契約者ノ間ニ於ケルモ

大  
文  
官

尚ホ一困難ノ起ルヤモ測ラレザルナリ  
布哇條約ノ局ヲ結ビ双方ノ海關稅則ヲモ取り定メタ  
ル後ニ於テ更ニ日本政府ハ英吉利若シクハ北米合衆  
國ト一條約ヲ取結ビ其契約者ノ一ハ為メニ布哇條約  
ヨリ一層大ナルノ利益ヲ得又其一ハ為メニ報酬トシ  
テ其裁判權ヲ恢復シタリト仮定センニ諛譲与タル決  
シテ無料ナル者ニアラズシテ即チ相互ノ負擔ヲ以テ  
セル有料ノ讓與ナリトス  
然レハ此時ニ當リ布哇ハ如何シテ此レト同様ノ利益  
ヲ得ベキ乎、彼レハ既ニ其利益ヲ讓与レタルニアラズ

ヤ然レハ尚ホ新タニ他ノ犧牲ヲ為スヲ要ス可キ乎是  
レ決シテ公當ナラザルナレバ此ノ如キノ議件ハ  
豫シメ之レヲ先見シ又之レヲ決定ス可キヲ要ス  
第八條 諸稅及ニ諸負擔ノ点ニ於テハ日本船舶ヲ以  
テ布哇船舶ト又ハ布哇船舶ヲ以テ日本船舶ト同様ノ  
者ニ見做ス可キ此條規ハ別ニ意見ヲ要セザルナリ且  
該條規ハ第五條ノ趣旨ヲ適用レタル者ニ外ナラズ  
第九條 此條規ノ全体ハ餘リ満足ス可ラザルノ有様  
ニシテ契約國ノ一方ニ於テ他ノ契約國ノ貨物ニ課ス  
ルニ他ノ國民ニ課スル者ヨリ一層高度ノ關稅ヲ以テ

セントヲ企望スル乎又ハ或ル貨物ノ輸入ヲ禁止スル  
トヲ企望スル乎ノ場合ヲ先見シタル者ナリ然レモ是  
レ等ノ事ヲ先見スルヨリハ寧シロ他ノ國民ノ為メニ  
関稅ヲ低下スル乎若シクハ或ル禁止ヲ廢止スル乎ノ  
場合ヲ先見スルヲ以テ一層當ヲ得ベキ者トス何トナ  
レバ此終リノ事ヲ先見スルニ於テハ関稅ノ抵下共ニ  
無稅ハ家恩惠國ノ取扱コヲ受クル法規ノ趣旨ニ依リ  
兩契約國ニ於テモ之レヲ利スルト云フカ如クナレバ  
ナリ故ニ布哇國外務卿ニ於テ此條約第九條ト第七條  
トヲ接近セシムル一説明條規ヲ設ケントヲ發言シタ

ルハ即チ此理由ヲ了解シタル者ト云フベシ該條規ノ  
又言共ニ説明ハ甚タ言語ノ終ニシテ別ニ深意ハアラ  
ザルモノナルベシ

第九條ノ法規ノ又体ヲ見ルニ日本ハ勝手ニ其海關稅  
ヲ制定スルノ權ヲ有シ布哇國ニ於テモ<sup>同様</sup>權利ヲ有スル  
ト豫定スル者ノ如シ而シテ此權利ハ何處ニカ之レヲ  
明言スルヲ要ス然レモ拙者ハ果シテ其何處ニ記載シ  
アルヤヲ發見スル能ハザルナリ  
然レモ拙者ハ各契約國ニ於テ條約完結ノ後尚ホ關稅  
ニ付キテハ其自由ノ權ヲ保有セントヲ贊成スルノ次

太  
改  
官



第二アラズ拙者ハ寧シロ兩契約者ノ為メニハ若干ノ  
期限即チ五年乃至十年間ハ約束税則ヲ以テ相連接ス  
ルノ方ヲ擇ムベキナリ然レモ其何レノ場合ニ於ケル  
モ其趣意ハ<sup>實</sup>明瞭ナラシムラ要スルモノトス  
若シ第九條ノ文意ヲシテ現在ノ文意ト全ク反對ナル  
形状ニ変更セシメ関税増加ノ代リニハ関税減少ノ  
ヲ記シ禁止ノ代リニハ無税ノ事ヲ記スルハ該條規  
タル海關税則ヲ本條約ト共ニ決定シ之レヲ其附録ト  
ナセル場合ニ於テモ尚ホ有用ナルモノトス何トナレ  
ハ此ノ如キノ趣旨ヲ揭裁スルニ於テハ若シ兩契約者

ハ一方ニ於テ他ハ一外國ト取結ガニ現在日本ト布哇  
トハ間ニ交換スル者ヨリ一層利益アルハ條約ヲ以テ  
シタル中ハ兩契約者ハ各自ヨリ同様ハ約束ヲ以テ同  
様ハ利益ヲ請求スルヲ得ベシト云フニ異ナラザレバ  
ナリ

第九條ハ又他ノ一種ノ困難ヲ起スノ場合アルベシ該  
條規ノ文意ニ依レハ兩契約國各自ノ物産ニ付キ多少  
高下ナル関税アル者ト豫定ス然レハ物産々出地ノ  
ニ付キ困難アルトナキ乎諸貨物ハ之レヲ布哇ニ輸入  
スルモ日本ニ輸入スルモ兩契約國各自ノ船舶ヲ以テ

太  
文  
宮

スル片ハ以テ其國ノ物産ナリト仮定スルニ充分ナリ  
トスル乎貨物ノ局外中立ヲ定ムルニ關スル時即チ  
戦時ニ適用ス可キ旗章ハ貨物ヲ蓋フトノ法理ハ此平  
常ノ場合ニモ適用ス可キ者ナルヤ貨物ハ實ニ本條約  
ニ依リ之レヲ輸入スル國ノ産物ナルヲ必用トセザル  
乎布哇船舶ハ日本ニ輸入スルニ英吉利若シクハ亞墨  
利加ノ物産ヲ以テスルノ恐レナキ乎貨物ノ性質上其  
産出ニ付キ又ハ其製造ニ付直チニ其外國産タルヲ顯  
ハスノ場合アルハ必定ナリトス然レハ之レ等ノ点ヲ  
モ豫シメ思考スルヲ要スヘシ

第十條 此條規ハ別ニ觀察ヲ下ス可キ所ナレ日本船  
船ノ布哇國ヨリ帰國スル時ハ彼ノ國ノ物産ヲ持テ歸  
ヘルヲ得ヘク又布哇國船舶ニ於テモ同様ノヲ得  
ヲ得ヘキハ當然ノヲナリトス

第十一條 此條規ハ其第一項ニ於テ拙者ノ前キニ決  
定アラントテ企望セシ二個ノ問題(第六條ノ部参考)ヲ  
決定ス其事タル即チ布哇人民ハ遺書ヲ以テ遺贈ヲナ  
スノ權アル乎又不動産ノ所有者タルヲ得ヘキ乎ヲ知  
ルニ有リトス即チ此ノ條規ニ依レハ第一ノ問題ハ之  
レヲ為レ能フ者ト決定シ第二ノ問題ハ之レヲ為ス能

ハガル者ト決定レタリ但シ其文中ニ物<sup>○</sup>品<sup>○</sup>、衣<sup>○</sup>服<sup>○</sup>、其<sup>○</sup>他<sup>○</sup>一  
個<sup>○</sup>ノ所<sup>○</sup>有<sup>○</sup>品<sup>○</sup>ナラデハ之<sup>○</sup>レヲ遺贈スルヲ許サバルノ文  
言アルヲ以テ見レハ該條規ハ動産ニノミ適用ス可キ  
者ノ如シ

此ノ如キノ制限ハ布哇國ニ於テ諸外國人ニ對シ同様  
ノ禁制アルヨリシテ之<sup>○</sup>レヲ設ケタルモノニアラザル  
トハ拙者ノ大ニ悲歎セントスル所ナリ然レモ若シ  
布哇人民ハ其邦内ニ於テ日本人民ニ土地ヲ所有スル  
ヲ許ス<sup>○</sup>トナルニ日本ニ於テハ布哇人民ニ對シ同様ノ  
權利ヲ許可セザル<sup>○</sup>トアラハ大ニナル誤テト云フベシ

此<sup>○</sup>トニ付テハ本論ノ前篇ニ附録ノ説ヲ參看ス可シ  
拙者ハ不動産所有權ノ事ニ付キ本條約ニ尚ホ一空處  
アル<sup>○</sup>トヲ爰ニ喚起ス可シ布哇國ニ於テ日本人民ニ對  
スル如ク日本ニ於テモ布哇人民ニ不動産所有權ヲ附  
与セザル者トセンモ彼<sup>○</sup>レ等ハ尚ホ外國人居留地ニ於  
テハ不動産ヲ所有スルノ權アル<sup>○</sup>トヲ承認スルヲ以テ  
必用ナリトス何トナレハ該權利ハ決シテ之<sup>○</sup>レヲ爭フ  
者<sup>○</sup>ナキハ疑フ可クモアラザレモ新條約ハ舊條約ヲ廢  
棄ニ屬セシムル者ナレハ布哇人民ノ諸權利ハ新條約  
ニ於テ制限サル、者ト云フヘケレハナリ

第十二條第十三條及第十四條 此諸條規ハ別ニ異  
論ヲ容ル、トコロナシト思考ス

第十五條 而契約國各自ノ人民ノ他ノ契約國ニ於テ  
執行スル宗教ニ関スル此條規ハ其文章ノ全体ニ依リ  
テ見レハ日本ヲレテ幾分ノ危難アラントテ恐レシメ  
タルカ如シ耶蘇宗教ノ普及ニ付キ傳教師ノ熱心ハ時  
トレテ内國宗教ヲ奉スル者ヨリ反對ノ騷擾ヲ起スノ  
原因トナラザル乎ヲ恐レタルカ如シ又宗教ノ自由ヲ  
制限セザルハ亜米利加ニ於テ其危難ナルヲ認メシ  
或ル正當ナラザル新教ヲ日本ニ輸入スルヲ試ミル者

ナキ乎即チ之レヲ反言スレハ押領ノ精神アルヨリレ  
テ歐洲最多ノ國ヨリ放逐セラレタル宗會ヲ日本ニ新  
設スルトナキ乎ヲ恐レタルカ如シ  
令一ノ善良ナル奉教自由ト日本政府ノ安全ヲ調理ス  
ルハ決レテ難キトニアラザルナリ  
以エニ先見シタルノ危難ハ單ニ布哇條約ノミアル間  
ハ決レテ恐ル可キ者ニ非ラサル可シ布哇國ノ方ヨリ  
レテハ激烈ニレテ國安ヲ妨擾スル程ノ耶蘇教ノ普及  
ヲモ、モルモン宗ノ輸入ヲモ、亦ジエイジエイト宗教  
者ノ侵入ヲモ、恐ル、トアラザルナリ然レモ他ノ外國

太  
文  
宮

ニ於テ布哇條約ト同様ノ條約ヲ承諾スルノ場合ニ於  
テハ前記ノ恐レハ最早其理由ナキ者ト云フ可ラズ  
一ノ善良ナル奉教自由ト國安トヲ調理スルノ方法ハ  
總テノ他ノ自由ノ執行ニ関スル片ニ於ケルト同様ナ  
リトス諛方法ハ即チ警察上及ヒ公安上ノ法律規則ノ  
執行權ヲ掌握スル之レナリトス

假令ハ佛朗西ニ於ケル宗教ノ自由ハ成ル丈ケ之レヲ  
完全ナラシムル者トス然レモ路上ニ於テ宗教ヲ執行  
スルカ如キハ警察規則ノ範圍ニ屬スル者ナリ之レヲ  
濫言スルニ路上ニ於テ宗教ヲ執行スルトハ許サハル

スノニシテ其執行ハ必ス特別ノ寺院中ニ於テスルヲ  
要ス又國安ニ危難アル者ト見ユル如キノ一新教共ニ  
モルモン宗ノ如キ善良ナル風習ハ之レヲ許可セザル  
可シ且ツ或ル宗教會社ノ如キハ亦之レヲ許可セザル  
トアリトス

故ニ日本ハ宗教警察ノ權ヲ掌握シ寺院ノ外ニ於テス  
ル説教ハ如キハ之レヲ妨止シ民屋内ニ於テ舉行スル  
宗教上ノ集會ニハ日本人民ノ召集ヲ禁止スルヲ得ベ  
ク又談集會ニハ集會條例及ヒ會社條例ヲモ適用スル  
ヲ得ベシ

第十六條第十七條第十八條 此諸條ニ付テハ別ニ意  
見ナシ

東京一千八百八十一年七月廿日

ジエイ、ホアソナーード手署

宇川盛三郎譯

○憲恩惠國ノ取扱ルノ件ニ於テ諸條規ヲ分離スル  
ト能ハザルトニ付テノ附録

本條約ノ第五條第十一條ヲ追考スルニ日本ニ於テ布  
哇人民ニ其土地ヲ所有スルノ權ヲ拒絶シタルハ之レ  
ヲ論議スルヲ已ム可ラザルトト思考セリ他ノ國民ハ  
日本ニ於テ不動産ヲ所有シ得ルノ見込ナキハ此ノ  
理由ヨリシテ同様ノ條約ヲ承諾スルヲ欲セザルベシ  
然レモ若シ布哇人民ニ於テ日本人民其他一般ノ外國  
人ニ土地所有權ヲ附與セザル以上ハ日本ニ於テモ布  
哇人民ノ權利ニ此制限ヲ設クルハ拙者モ賛成スル所

ナリ

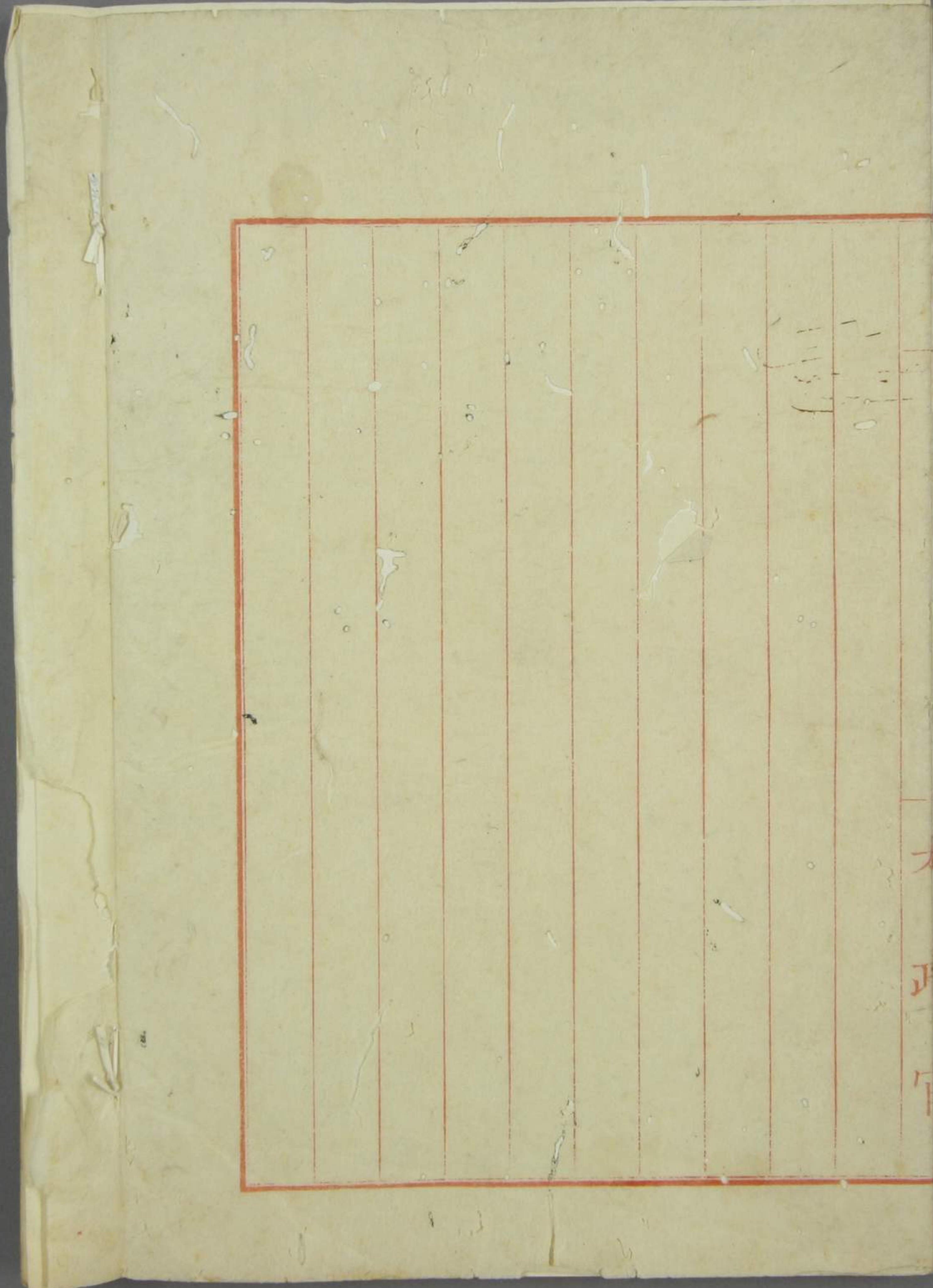
然レ氏此問題ハ最恩惠國ノ取扱ニ於テ諸條規ヲ分  
離ス可ラザルトニ付キ拙者ニ又一新論據ヲ與フルモ  
ノナリトス

拙者ハ今外國人ヲシテ邦内ニ土地ヲ所有スルヲ得セ  
シムル所ノ佛朗西若シクハ伊太利ニ於テ日本ニ讓与  
スルニ裁判權ノ幾分ヲ以テシ其報酬ニ其國民ヲシテ  
日本ニ於キ土地ヲ所有セシムルノ權利ヲ得タリト仮  
定センニ邦内ニ於テ外國人ニ土地ヲ所有スルトヲ許  
サハルトコロノ他ノ國民ハ少クモ裁判權ヲ讓與スル

下モナクシテ日本ニ於キ土地ヲ所有スルノ權ヲ請求  
スルヲ得可キ乎如是キノ請求ハ豈ニ之レヲ盜賊ノ所  
置ト云ワザルヲ得ンヤ

日本ハ其邦内ニ於テ佛朗西人民及ヒ伊太利人民ニ讓  
與スルニ土地ノ所有權ヲ以テシタルハ彼レ等ニ於テ  
少クモ其所有スル不動産ニ付テハ日本ノ裁判權ヲ承  
認スルト又日本人ハ佛朗西ニ於キ及ヒ伊太利ニ於  
キ其土地ヲ所有スルヲ得ルトノ兩義アルノ故ナルト  
ハ甚タ明白ナリトス

畢



本  
正  
一  
下